

第1章 研究主題と主題設定の理由

特別支援教育とその視点に立つ学校教育

1

特別支援教育とその視点に立つ学校教育

人々の「心」に関して、疑問や義憤を感じる事故や事件が多発しています。

その背景には、大人や社会の問題があります。大人が生きる自信を失い、利己的になり、社会が互いを支え合う「絆」を喪失してしまったことが、さまざまな事件や社会不安の原因の一つです。そして、子どもたちの心身の健全な成長には、「豊かな環境」と「失敗を許される多様な経験」が不可欠であるにもかかわらず、利己的でゆとりのない大人社会は、無意図的に効率化の名の下で子どもたちを追い詰めています。

その責任は「大人」にあり、「教育」にあります。

特に、ストレスフルで劣悪な環境と乏しい経験が子どもたちの脳（心）に深刻な影響を与えており、発達障害や二次障害に苦しんでいる子どもたちが通常学級には多数います。

本校では、そのような子どもたちを「教育を通して支援する」ためには、大人の意識の中にある「これまでの『特殊学級・特殊教育』」という考え方を一刻も早く打破し、『子どもの困り感に寄り添う支援教育』という意味での特別支援教育へと意識転換し、新たな教育の創造に向かって一步を踏み出すことが重要ではないかと考えています。そして、その出発点は「教師（大人）の意識改革」にあります。

本節では、なぜ本校が特別支援教育を柱に学校創りに取り組もうとしたのか、どのような学校を目指して、苦闘し、どのように課題や困難を乗り越えようとしているのかなどについて、研究主題とその設定理由（背景）をもとに述べます。

1.1.1 研究主題

研究主題

埼玉県教育委員会委嘱・埼玉県特別支援教育研究会委嘱

「特別支援教育の充実とその視点に立つ学校教育の推進」

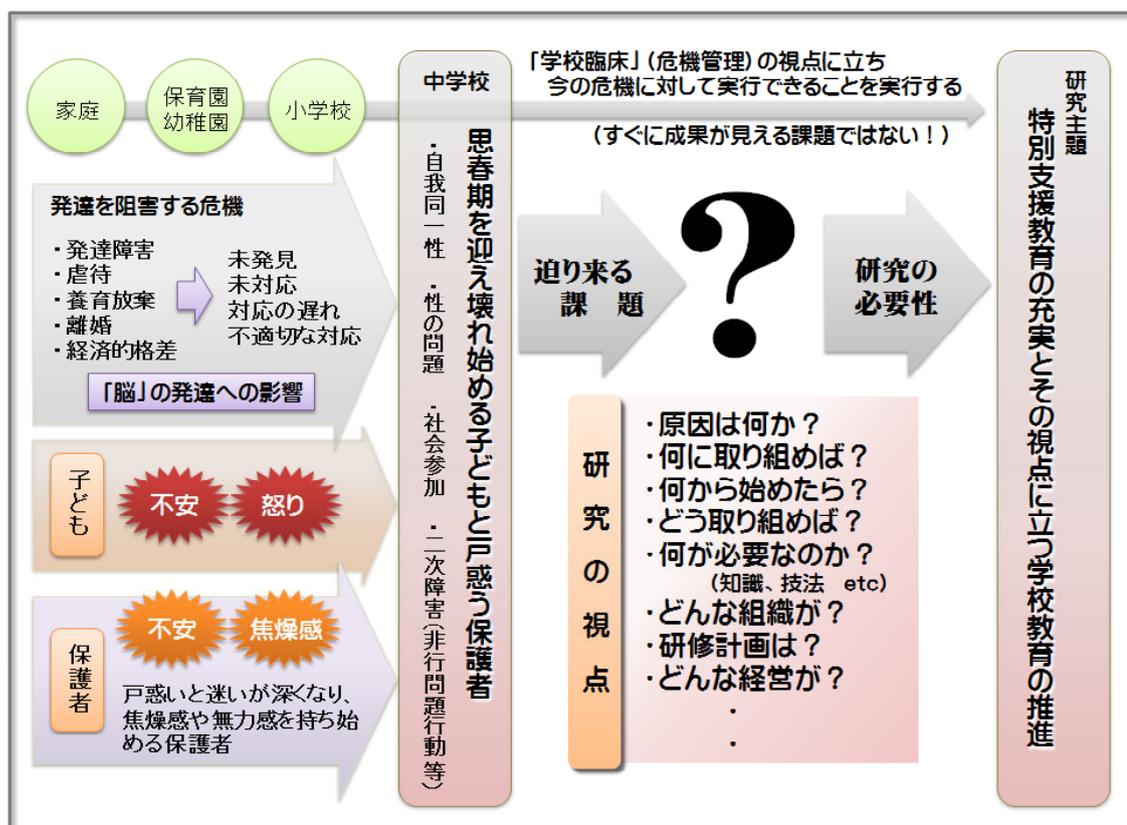
- 校内推進体制の構築と特別支援教育の視点に立った学習指導の在り方 -

1.1.2 主題設定の理由

家庭、保育園・幼稚園、小学校と、学習や経験を積み重ね順調に成長・発達してきたように見える子どもたちですが、発達障害、虐待、養育放棄、両親の離婚、経済的格差などの「発達を阻害する危機」の影響を受け、「言いようのない怒りと不安」に押しつぶされそうになっている子どもたちが増加しているのではないのでしょうか。そして、迫り来る危機に対して、未発見、未対応、対応の遅れ、不適切な対応などが、状況をさらに悪化させてはいないでしょうか。

特に、さまざまなことに悩み始める思春期の中学生が「発達を阻害する危機」から受ける影響は深刻です。

しかし、「発達を阻害する危機」への対応は喫緊の課題であるにもかかわらず、多くの学校や教師は、迫り来る課題の原因は何か、何に取り組めばいいのか、何から始めたらいいのか、どのように取り組めばいいのか、取り組むためには何が必要なのか、どのような組織が有効か、どのような学校経営や学年経営が必要なのかなど、具体的な知識や方策を持っていません。発達障害のある生徒一人ひとりの「困り感」は違っており個別指導が必要ですが、そのための知識や指導経験も不十分です。



本校では、上図の「？」を明らかにすることがこれからの教育を考える上で重要であると考え、「特別支援教育の充実とその視点に立つ学校教育の推進」を研究主題として、学校臨床という考え方をもとに研究に取り組むこととしました。

1.1.3 時代の転換点に立つ教育（主題設定の背景）

■ 疲弊する社会と子どもたち

「子どもは社会を映す鏡である」との言葉を、自省を込め、改めて強く意識しなければならない時代が訪れています。

これまで、子どもの問題は、学校や教師の指導や対応に問題があるとか、子ども自身やその保護責任者であり養育責任者である保護者や家庭に問題があるなど、問題の原因やその責任を問うような論議が多かったように思います。

しかし、そんなことを論じている状況ではないことを最近の新聞報道は伝えています。

新聞報道によれば、100歳以上の居所不明老人の数は日を追うごとに増えていますし、児童虐待数は統計を取り始めてから過去最高件数を記録し、世代を超えて繰り返される虐待の連鎖も問題になっています。

また、30歳代をピークとしたひきもり数が70万人、その予備軍は155万人と推計されるとの新聞報道

もあります。さらに、離婚件数が急増し欠損家庭が相当数になる一方、DVや養育の歪みによるストレスに子どもたちはさらされているのが現実です。

このような経済の停滞による生活保護家庭数の激増、虐待や暴力を受けながら育つ子どもの増加など、子どもたちの生育環境の悪化は目を覆いたくなるような状況です。そして、前述したように、子どもたちを取り巻く環境の急激な変化と劣化が、子どもたちの脳（心）にさまざまな影響を及ぼし、発達障害や二次障害に苦しんでいる子どもが増加している現状は、もはや看過できないレベルにまで達しています。

さらに、特別支援教育に関して、国の調査では6.3%、埼玉県の調査では10.5%の割合で通常学級に発達課題を抱えた児童・生徒が在籍しているといわれていますが、生育環境の劣悪化から生じる二次障害に苦しむ子どもの数を加えれば、その数は想像以上になるのではないのでしょうか。

社会の崩壊・大人の崩壊・家庭の崩壊があり、社会全体が疲弊し、自己保身が優先し、社会にゆとりがなくなっていることが、過干渉・

過保護な保護者のもとで育てられた子どもがいる一方で、無保護・無干渉で愛情飢餓の状態にある子どもたちも少なからず学校に登校してきている状況を生み出しています。そして、権利意識が高じて一方的に要求を突きつけてくるモンスターペアレントを生みだし、学校教育の基盤を容易に破壊するほどのエネルギーへの対応に、学校は疲弊していくという例も多くなっています。

私たちが「言いようのない不安」にかられているのは、「社会が崩壊しつつある」ことや、「これまでの社会や教育が、次代を担う人財（人材）の育成に失敗している」という思いを抱いているからではないのでしょうか。

残念ながら、これからの教育は、社会（大人）の崩壊を直視しながら、子どもたちの未来を目指して一步を踏み出さなければならない厳しい状況の中にあります。

壊れ始めている子どもたち **（本校の実態は？）**

読売新聞一面（2010/07/24）

ひきこもり70万人

予備軍も155万人：増加に危機感
3大要因「職場」「病气」「就活」

**解決は容易でない
知識と人財の不足**

東京都

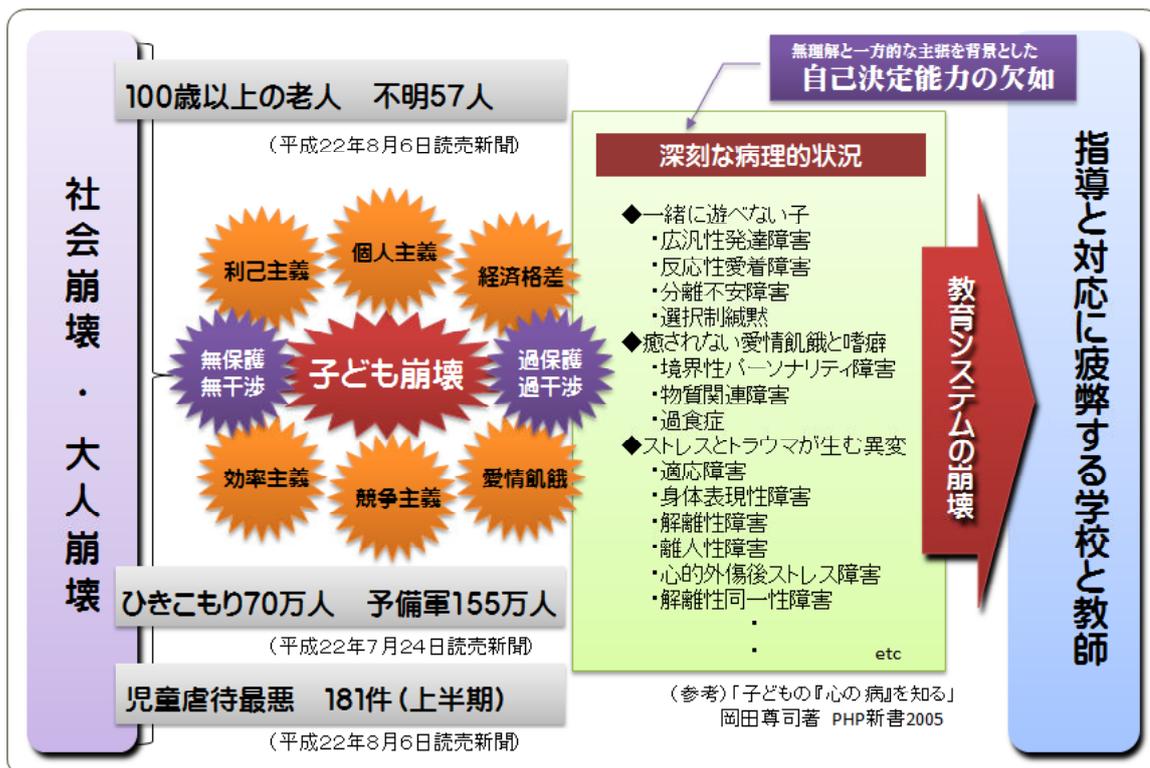
すべての学校に特別支援教室

発達障害のある子どもが5年間で2.5倍に増加

**私たちは、この報道をどう捉え、何を考え、何に取り組めばいいのか？
これまでの教育が、次代を担う人財（人材）の育成に失敗している？
（教育観、教育制度、指導方法、子ども観などが時代と齟齬 → 崩壊？）**



■ 時代の転換点と教育観の転換



さまざまな社会問題は、社会崩壊、大人崩壊、教育システムの崩壊などに象徴されているように、成長し伸びようと努力している子どもたちに深刻な影響を与えていることは容易に想像できます。

私たち大人が忘れてならない重要なことは、子どもたちは、知らず知らずのうちに環境や周囲の人々から影響を受け、生きる術を身につけつつ成長を続けており、それは今の生き方に影響を与えることはもちろん、その子のこれからの生き方、人付き合い、恋愛、夫婦関係、子育て、仕事の仕方など、その後の人生に強い影響を与えるということです。そして、身につけたさまざまな生き方の要素が役に立つ場合もあれば、人生を損なうことにつながる場合もあるということです。

さらに重要なことは、社会が疲弊し崩壊しつつある状況は、「これまでの教育をこれからも継続してよいのか」という視点で「これからの教育のあり方」について再検討しなければならない時期を迎えていることを示しているということです。

どのような時代にあっても、どのような深刻な状況下にあっても、「これからの社会を築いていくことができる未来の大人を如何に育てるのか」という命題に、教育は正面から立ち向かっていかなければなりません。そのためには、これまでの教育を見直し、教育観を転換することが不可欠なのです。

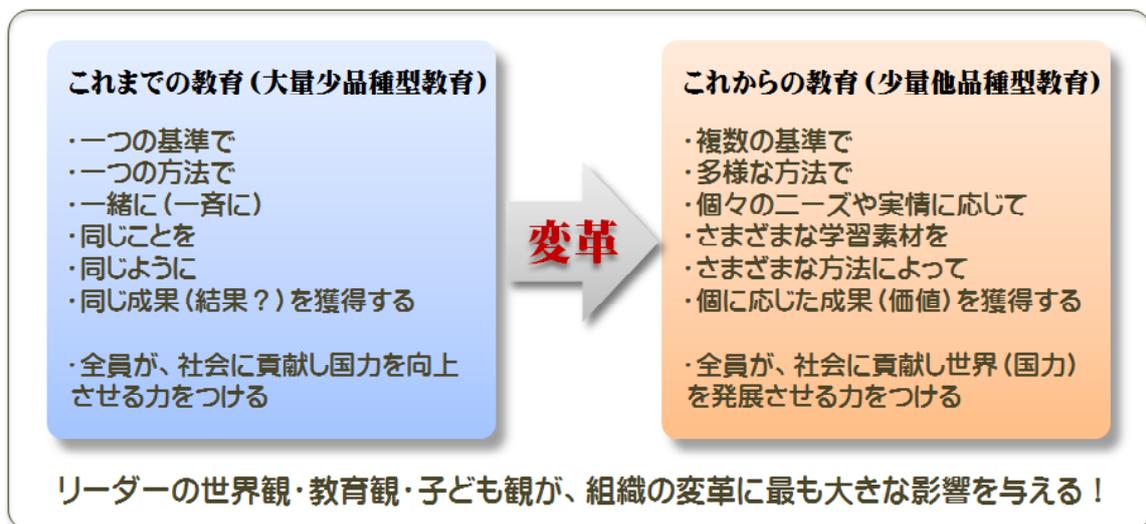


これまでの教育は、「僅かの差はあっても子どもたちはほぼ同質で、どの子どもも学びに

対して意欲的で、一斉・画一的な指導方法で教育したとしても、期待する教育成果を得ることができる」という教育観に立った「大量少品種型教育」ではなかったでしょうか。個別化や個性化を唱えつつも、結果的には、どの子どもにも少ない労力でどう効率よく同じ教育成果を獲得させるのかを研究し、その実現を競い、さまざまな工夫を重ねながら教育実践に取り組んできたのがこれまでの教育でした。

しかし、教育ニーズが多様化していることや、通常の学級に発達障害を含め特別な支援を必要とする子どもが複数在籍しているという前提に立って教育を考えると、これまでとはまったく違った教育観・子ども観・授業観が必要になります。

特に、「すべての学校において特別支援教育に取り組む」ということは、通常の学校・学級で教育を担当してきた多くの教師が、これまでの教育実践を通して磨き、構築し、蓄積してきた教育観、指導観、授業観を、自らの意志とは関係なく転換する必要に迫られるということになります。そして、この教育観の転換が、特別支援教育に取り組もうとする教師を苦闘させることとなります。



特別支援教育に取り組もうとすると、教師は、一人ひとりの子どもが抱えている課題がまったく異なっており、これまでの教育手法では「通じない」「伝えることができない」という現実に戸惑い、一斉・画一的な指導で個々の発達課題に対応することなどできないという事実と直面します。

このことは、これまでの「大量少品種型教育」を、複数の基準で、多様な方法で、個々のニーズや実情に応じて、さまざまな学習素材を、さまざまな方法によって提示し、個に応じた成果を獲得させるなど、通常学級での教育を「大量少品種型教育の良さを残しつつ、少量多品種型教育へと変えていく」という、ある意味では矛盾した命題に取り組まざるを得ない状況の出現であり、今日の教育の混乱や教師の疲弊を招いている一因なのかもしれません。

「どの子どもも、少しでも良くなり、できるようになりたい」と強く願っていますが、個々の子どもが抱えている課題の多様性に応えるためには、効率化をめざして磨いてきたこれまでの教育手法だけではなく、新たな教育観とそれに基づいた新たな教育手法が必要な時代が訪れています。そして、課題を乗り越える力量と覚悟が、これからの学校と教師に求められています。

■ 「子どもが育つプロセス」を大切にしたい教育を目指して（本校の研究の背景にあるもの）

本校の研究は、法律の改正を受けて特別支援教育に取り組むという受け身的な姿勢で取り組んだ研究ではありません。むしろ、社会や大人の崩壊が子どもたちの育ちを歪めているという「子ども崩壊」の時代において、改めて「子どもという生まれ出た命が育つプロセス」を教師も保護者もしっかりと学び、陥りやすいさまざまなトラブルや障害について知っておくことがこれからの教育においては必須であり、その確かな理解の上に立って「すべての子どもたちのために最適な生育環境（教育を含めて）をどう再構築するのか」を考えなければならない時代が訪れているのではないかとの認識が、研究の前提になっています。

私たちは、これまでの教育が制度疲労を起こし、新たな教育の仕組みと仕掛けが求められている教育の転換点・時代の転換点に立っています。しかし、残念ながら、私たちは“通常の学級において、発達障害の有無を超えて、次代を担うかけがえのない子どもたちにどのように向き合い、どう対処しながら普通教育を進めていったらよいのか”という問いに、明快な答えを持ち合わせておらず、参考にすべき前例が極めて少ない状況の中にいます。

さらに、子どもたちの生育環境が想像以上に劣悪化し、LD、ADHD、高機能自閉症などの発達障害だけでなく、幼少期の愛情不足による反応性愛着障害、被虐待や暴力などがトラウマとなって起こる解離性障害などに苦しんでいる子どもが増加傾向にある一方で、これまで蓄積してきた指導方法が通用しない状況に戸惑い、苦しみ、ストレスにさらされながらも「子どもたちを何とかしたい」と願う教師を、どのようにエンパワメント（その人が本来持っている力を内から引き出すこと）するのかという課題にも直面しています。

本校では、このような困難な状況を打破できる数少ない選択肢の一つであり、教育を変革できる大きな可能性を秘めているのが「特別支援教育の充実とその視点に立つ学校教育の推進」ではないかとの思いから研究をスタートさせました。

本研究では、「特別支援教育の視点」という言葉が重要なキーワードになると考えました。その理由は、発達障害等に対応するための知識や手法を学び実践するというのではなく、発達障害等に関する知識や対処方法を学び、その視点に立って通常の学校での教育のあり方を明らかにしていくことが研究に取り組む価値であると考えたからです。

さらに、時代の転換点にあって、管理職として特別支援教育に取り組む意味や価値について改めて考え、「この状況をどう改善していくのか」「この状況を『学校の危機管理（学校組織マネジメントの危機）』という視点からどう解決していくのか」という立場に立って、教育のあり方を再吟味し、再構築していくことも重要な研究課題であり、学校経営と教育実践との関係を、特別支援教育という視点で捉え直すことが教育の新たな扉を開くのではないかと考えました。

通常の学校における特別支援教育への対応状況は、学校によって大きく異なり、特別支援教育や発達障害等に関する理解が不十分な面があります。したがって、すべての学校が特別支援教育に取り組み、教育的成果を上げるまでには、乗り越えなければならない多くの壁（課題）があります。しかし、その壁を乗り越えない限り「持続可能な社会」を構築することはできないのではないのでしょうか。

本校の研究は、「苦闘しながらも研究や実践を前に推し進めよう」とする、教職員の思いをエネルギー源としてスタートしました。